

# 教科の関連性を活かした学びのデザインからよりよく生きる力を育む ～図画工作科の可能性をさぐる実践から～

福井大学教育地域科学部附属小学校 渡 邊 淳 子

小学校教育は、人間形成の大事な土台の部分である。小学校の6年間で、未来を切り開く意志をもち、生きる力の土台をしっかりと育むことが大事である。本研究は、「生きる」ことをテーマに、教科の関連性を活かした授業実践研究である。その統合的単元のなかで、図画工作科が果たす役割、可能性をもさぐっていきいたい考えるものである。

**キーワード：**教科関連、統合的単元、生きる力、学びのデザイン、スパイラル

## 1. はじめに

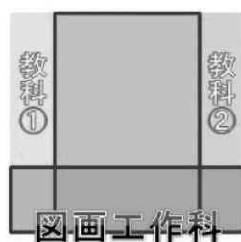
生きる力を支える表現力や思考・判断力、それらを活かした問題解決の力等は、単独の教科の学習のみで身につくわけではない。それらの学習を統合したり、再構成し直したりする場や活用する生きた場があつて初めて、実感を伴う力となり学力となり得る。それらの学習の全体を通して、自ら課題を見つけ、自ら学び、考え、判断しよりよく問題を解決する資質や能力を身につけたり、自らを律しつつ、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性を育んだりしながら、生きる力を養いたいと思う。

そこで、1つの教科という枠を超えて、長いスパンで広い視野でじっくりと考えることができるような統合的な単元を組み、多様な学びの場や時間を保障していきたいと考えた。

### (1) 統合的単元の意義

#### ①各教科の重なりを活かす

各教科のなかで、今回のテーマ「生きる」のように関連する部分を共有することで、学びを深め、補強できると考える。思考し判断する機会を重ね合わせることは、効率的であると同時に、より深い問題解決のヒ



【図1】図画工作科と他教科

ントを与え、資質を育むことができると考える。図画工作科を各教科のつなぎとして、生きる力の総体を育みたい。

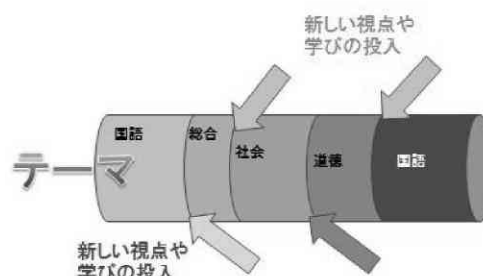
#### ②フレッシュな切り口（視点）を提示する

各教科・領域の横断的な関連性の中で、多方面からの視点を入れることで、新たな考えや柔軟性のある考えをもたせることができる。

#### ③長いスパンでより深く考える

各教科ごとに、1時間1時間で授業を閉じてしまえば、発展性や次への期待感がなくなり、考え続けるスタンスを失いがちになる。いろいろな判断材料をもつ

て、常に考え続ける姿勢を育むことが大事で、納得できるまで取り組んでいくことに意義があると思う。



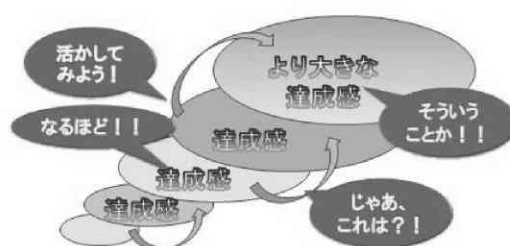
【図2】多方面からのアクセス

#### ④タイムリーにコラボすることで感動を演出する

まさに、『機を見るに敏』でなければ意味はない。話題や新しい視点の提示は、タイミングや前後関係を誤れば、とたんに色あせる結果を招く。絶妙のタイミングであることが、授業においては、感動を生む根源である。感動のある授業であることこそ、力をつけることができるのだと考える。

#### ⑤活用のよさの実感と活用の意欲をもつ

生きる力を育む最も根幹の部分である「活用」に目を向けると、関連性をもたせた繰り返しの学びの中では、達成感がより大きくなるということである。結果的にはそれが、学びというものの大きな意欲につながるものであることはいうまでもない。



【図3】活用と達成感

## (2) 関連性を活かす統合的な単元構成について

これらの考えをもとに、統合的な単元を構成する。まずは、カリキュラムの全貌をよく俯瞰することが大事である。単元や教材だけでも関連性が見つかることはもちろん、1単元・1教材の中の細かな時配のなかにはもっと関連性がかくれているものもある。大きな統合的単元だけではなく、小さな関連性もよく理解し、丹念に掘り起こし、自分なりのアレンジをし、再構成を図ることが大事である。

小学校の第6学年の場合は、大きく以下のような統合的単元としてのテーマを掘り起こした。

- A 生き方**：偉人の生き方やこれからの自分の生き方について考えるという内容がふくまれるもの。
- B 文化**：先人の成し遂げたことを知るなかで文化の意義やその奥深さについて考えるという内容である。文化創造の素晴らしさや守り続けてきた文化の可能性、ひいては自分の表現する意味について学ぶことができる内容である。
- C 平和**：日本が経てきた歴史的な流れから平和へのヒントを見つける内容である。あらたに、自分の周りの平和に気づき、平和に強く立ち向かう姿勢を育てたい内容である。
- D 命**：卒業という節目を迎える子ども達が様々な人や事象への感謝の念をもつ場面は多々ある。そこで、改めて、命のありがたさについてふれさせたい内容である。

それらの中で、今回は、図画工作科に関連するもののなかで、「生きる」をテーマに統合的単元を構成したものについて述べる。

## (3) 育てたい児童の姿

このように関連性を活かした学びを経験すると、次のような子どもの姿が浮かび上がると期待する。

A もっと自分と違うやり方や考えを知ろうとする子	他とのつながり (交流)	新しい視野・ 発想の獲得
B 確固たる自分(の考え)を確立しようとする子	熟考 (繰り返し考える)	学びの拡充・ 深化
C 自分の思いを試したり、広げたりしようとする子	活用への意欲・ 自己実現への意欲	活用への意欲の高まり
D 自分の生き方を見つめ、よりよく生きようとする子	自己存在の確認 他己存在の意義の実感	自己肯定感の醸成

そして、未来を切り開く強い意志と力をもった子ども達を育てたいと考える。

## 2. 実践の実際から

## (1) 図画工作科と総合学習の関連

『10年後のわたし』(6時間配当)

小学校卒業を機に自分の将来の夢ややりたいことを形に表す題材を設定した。自分のなりたい職業ややりたいことを立体で表現する。その図画工作科の学習と国語科・総合学習・道徳の関連性のなかで見つめ直す学びのスパイラルの中で、自己のあり方を見つめ、自分の生き方にまで迫ってくれることを期待したい。

子ども達は自分の未来予想図を3Dのジオラマでつくり出すことに挑戦した。

## 【材料】

人体の芯材・紙粘土・台の板材・背景の板材

各自が必要と思うものを用意

(布・アルミ箔・リボン・包装紙・毛糸・段ボール・ストロー・割り箸…など)

## ① 図画工作科のねらいから

- ・心の中の自分と対話し、自分の思いを聞き出して形にしようとする意欲をもつ。
- ・人体のバランスについて気づき、自分の表したい思いに寄り添う動きをつくり出す。
- ・材料を活かし、工夫して思いに合うようにつくる。
- ・空間の中で自分の思いに合致するように構成をする。

(授業の様子)

## 【人体のバランス】

人体のバランスは、実は小学校の子供にとってはとても理解しがたく難しい。ある程度形づくりをサポートできるように市販の芯材を使っている。しかし、本当に難しいのはここからである。自分の思いを表すために、どのような動きがふさわしいのかについては、お互いにポーズをとらせて相互に確かめ合わせた。また算数の比の学習を活用し、実際の人間と人体の骨格標本を比べたりしながら、肩幅、頭蓋骨の大きさ、関節の位置、関節の曲がりなどについては、納得できるまで観察させてみた。結果、何とかそれぞれに着地点が見つかり、次の段階に進むことができた。



【写真1】授業の様子



【写真2】授業の様子

粘土で肉付けをしていく。その際にも、芯材だけの時のバランスを思い出しながら制作。

### 【空間構成】

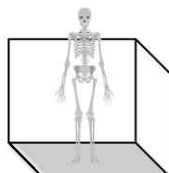
さらに困難が続くのは、空間の構成である。自分が表したい思いに欠かせない背景を考えたとき、個々のモチーフをどこにどう入れ込んでいくかは、試行錯誤が必要である。どう置いたら最も効果的か、思いを全て言い表せるか…子ども達は悩む。つくり、つくり変えていく姿がそこにはあった。



進度も材料もオリジナルで自分のプランに沿って。

【写真3】授業の様子

最後に、背景をつけることでより思いに寄り添う表現ができるようにした。背景の扱いはそれぞれで、2面～3面構成で立ち方は、それぞれの思いによるところである。



【図4】3面構成

### ② 道徳のねらいから

- ・自信をもって自分の思いを表出、表現させることの大切さに気づく。
- ・友達の思いを大切に见守る。

### ③ 総合学習のねらいから

- ・キャリア教育の視点に立ち、自分の将来に夢をもち、目標をもつことの大切さに気づく。

子ども達は、修学旅行で『キッザニア甲子園』にて職業体験をしている。そこでは、自分が知らないところにも様々な仕事があることに驚いたり、実際の仕事の一端を知り、仕事への興味をもち面白みを感じたりした。しかし、その反面、仕事の難しさや大変なことがあることも気づくという体験をしてきた。そういう中から育んできた自分の将来の姿を描いたことは、ある程度のリアリティも伴った制作となった要因であったと考える。

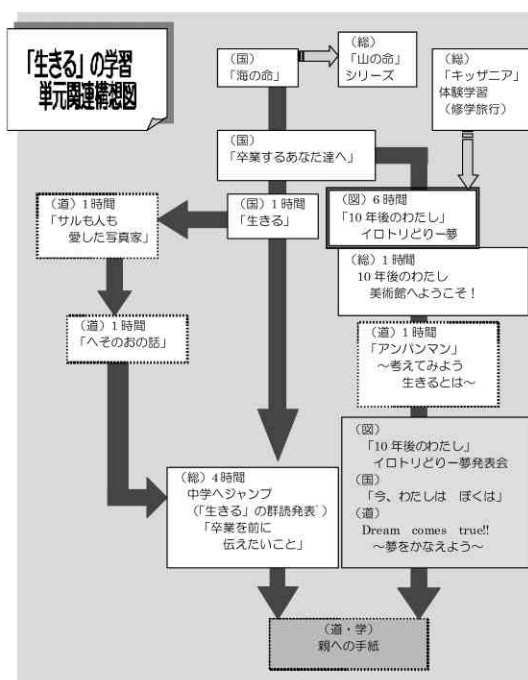
以下に子ども達が職業体験をしたときの感想を挙げる。

ただ、楽しただけでなく、見えない苦労や就業の意義について考えを巡らせているのが分かる。

### (職業体験後の感想から)

- ・…仕事はみんなが少しでも便利になるように笑顔になれるように、楽しく暮らせるようにみんな一生懸命働いているんだと思いました…
- ・…職業は自分で仕事をさがし、工夫して楽しくやるのを職業というんだと思いました…人を救いたい、楽にさせてあげたい、安心して暮らせるようにしたいと思いながら心をこめてすることができました…
- ・…お父さん、お母さん、おばあちゃん、おじいちゃんはこんなに大変な仕事をのりこえて今も一生懸命仕事をしてくれているので、…お礼を言いたいなと思いました…親に「ありがとう」を言えるチャンスをくれるのも一つの意味だと思いました…
- ・…ここで学んだことは仕事は大変だということです。軽い気持ちで仕事をしたらだめなんだということを知りました。大人になったら真面目にやっていきたいです。

この単元は、下の図のように「生きる」という大きな統合的単元構成の中にある。一つ一つの単元も教材も全て、他教科との関連性のなかに存在している。またそれぞれのたとえ1時間の学習であっても、その裏側に、幾層にも折り重なって交わり合っている関連の学習があるということである。全ての既習事項や経験値が幾層にも複雑に絡んでいるのである。



【図5】単元構成図



## (2) 総合学習と図画工作科の関連

『10年後のわたし』美術館へようこそ！ (1時間)

いよいよ作品が完成し、子ども達は達成感に包まれた。同時に心地よい疲労感のなか、この作品を全校児童にアピールすることを熱望する子ども達。過去に

○『音の美術館』(音楽科・国語科との関連)

○『すみっこな美術館』(総合学習との関連)

○『にじっこ美術館へ ようこそ！』(国語科との関連)の学校美術館活動を行った経験から生まれたものであると考える。少なからず、自分の作品を多くの人に見てもらいたいという思いや達成感を、美術館活動という形で提示できることに喜びを感じていたのだろう。そして、子ども達はこれを、小学校最後に向かい、自分達の意志をもった学習として強く意識していったのである。空き教室を美術館にし、全校児童に見てもらい、感想をもらうという活動は、まさに自分の学びや生き方の正当性を問うかのような活動であったかもしれない。

休み時間に鑑賞している下学年の児童に説明に行ったり、触らないで鑑賞できるように注意を促したりするためにすすんで出かける子どもも多くいた。どのくらいの反応があるのか、気になるのかみんなが登下校の際には、美術館を設置した教室の感想コーナーをのぞいていた。驚くほどの感想が寄せられた黒板を見て、一層満足感を募らせていたのであった。



【写真4】校内美術館



【写真5】感想の付箋

【写真6】下学年の鑑賞風景

(低学年からの感想)

- ・本物みたいにつくってあってすごかったです。ぼくもあんなに上手につくりたいです。
- ・〇〇さんのがほんとうの筆を使ってあってびっくりしました。

## (3) 図画工作科・国語科・道徳の関連

『イロトリどりー夢』発表会(1時間)

この授業は、3つの教科のマッチングの1時間である。関連性をもたせた3つの教科で1時間をデザインすることによって、子ども達の学びをより、深く凝縮したかったからである。全ての集大成として、真剣に語り合い、真剣に聴き合うことで新たな学びと生き方を手に入れてほしかったからのである。

この時間に至るまでには、道徳の時間に「生きる」ことについて考える1時間をもったり、日常的に心のノート(毎日の振り返りをしたりということにも取り組んでいる。)



### ① 1時間の大きな流れ

#### I 図画工作科・国語科

- 『イロトリどりー夢』発表会  
(作品相互鑑賞)
- 聞く人の心に届くように話そう  
「今、わたしは ぼくは」

#### II 国語科・図画工作科

- 作品鑑賞の振り返り
- スピーチの振り返り

#### III 道徳

- Dream comes true!  
～夢をかなえるには～

学習の流れは、クロスセッションを取り入れて、より多くの子と交流を図ることを主軸とする。その中で自分の考えをより確かに深め、生き方を見つめることにつなげたいと意図したからである。人は人とのかわりにあって初めて自分の考えを再

確認し、見直すチャンスを得、じっくり考えるきっかけとすることができる。そして熟考を重ねることで、成長の糧とし、自己の生き方を確立していくことができると思う。

そこに自分の思いを表出させた造形物を合わせ、語るという言語活動を入れることで、新たに言語表現とのコラボが生まれ、理解を深めることができるようになる。人が人を理解するのに、表現された作品などの実体に言語を介入させれば、この上なく有効である。こうして色と形のコミュニケーションと言語によるコミュニケーションの効果と作用を理解して進める楽しい鑑賞活動をベースに、生き方をみつめる道徳へとつないでいくことにした。

**イロトリと夢**

名前

●流れ

**スピーチタイム**  
一人2.5分くらい  
×人数(？セット)

◇届ける側・聞く側…思いやりの心で  
◇時間はきっちりではなくてもいいです。

**フリートーク**

◇自由に語り合きましょう。  
・作品のよさ・おもしろさ…感動したところなど  
・友達への共感、自分に活かしたいことなど  
・お互いへのエール

**リフレクションタイム**

◇自分のふり返りをしましょう。(国語ワークシート)  
・「話す・聞く」…よかった点・課題点  
・構成面など

**ハーベスト**

◇みんなで今日の伝え合いについて考えてみましょう。

●今日の感想をまとめましょう。

聞く人の心へ届くように話す  
く、わたしは ぼくは

【図7】ワークシート

## ② それぞれのステージの概要

### I 図画工作科・国語科の展開について

最初に『10年後美術館』のたくさん貼られた付箋を見て思ったことを聞いてみた。

(授業の様子から)

- S1：みんなが細かいところまでみてくれたことがうれしかったです。
- S2：いろんな感想が届いて思いが伝わったのがうれしかったです。
- S3：どの学年も感想を書いてくれていて何歳でも共通に通じ合える何かが伝わっていると分かりました。
- S4：思いが伝わってうれしかったTさんの発言に付け加えなんですけど、思いが伝わってもっと夢に向かって、がんばりたいと思いました。
- T：思いを伝えるだけでなく、リターンがあるのがうれしいよね。

図画工作科のステージに入る前に、5分ほど国語科の「話す・聞く」の観点について考えさせて

いる。大事だと思うポイントを絞って考え、めあてを意識させた。子ども達から出されためあては以下のようなものである。

#### 届ける側

- ・一番伝えたいことを強調する。
- ・声の大きさを変える。
- ・伝えたいことは何度も繰り返す。
- ・たとえなどを入れる。
- ・詳しく分かりやすく例を挙げる。

#### 受け取る側

- ・相手に分かるようにうなづくとか反応する。
- ・質問するといい。
- ・自分の意見も伝えてあげるといい。
- ・間の取り方も大事。

など

#### 【国語科のねらいから】

- ・自分の思いを伝えるために工夫し、相手の心に届くように話すためにどうしたらよいか考える。
- ・相手の思いを聞き取るために大切なことを知る。



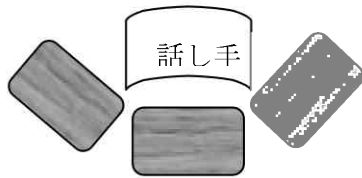
【写真7】授業板書

#### 《スピーチタイム》

まず、自分の作品について、思いを語らせる。将来の夢について語り、作品の工夫点やうまくいった点、思い入れのあることについても同時に話す。その際に作品のなかでそれらのことがどう表されているかをみとってもらう。

→スピーチに関しては原稿を書くことは一切しない。子ども達の生の声を聴きたいためである。作品をつくった段階から、思いに寄り添いながらつくっているはずなので、それをたとえたとえどしくても素直に出してほしいと考えたからである。その絞り出した言葉の一つ一つに真実があり、聞き手に思いが届く第一歩であると考えたからである。思いやりの心で聞くという大前提があって初めて、伝える側に立ったときも真剣に話せるのである。当然、聞き手側もメモはとらず、心を通じ合わせて聞いている。

→隊形も意見や言葉が呼応しやすいようにすることにした。些細なことのようにも、フォーメーションの変化だけでも、子ども達の意欲を左右することもある。



【図8】フォーメーション

(授業の様子から)

S 1 : 僕はテレビに出る歌手です。初めはテレビに出て派手なかつこうするのが嬉しいと思ってたんだけど、この間お楽しみ会で歌ってみんなから手拍子とかもらって、そしたら、こうやってみんなの笑顔をみていて、心を癒せるようになりたいなああって。あと、この作品のお客さんを見てほしいんだけど、これいろんな人がいて外国人とか宇宙人まで・・・宇宙人なんてふざけてるって思うだろうけどそうじゃなくて、ほんとに宇宙の果てまで僕の歌を聴きに來てくれる人がいたらいいなああって思って。自分に足りないことは中途半端だってこと。ちゃんと最後まで努力して、みんなも僕がテレビとかでてたら、この人、小学校の時の同級生でって言って応援して。僕も歌でみんなのことを応援するから。

S 2 : ほら、このお客さんの顔が一つ一つ違うのわかる。

S 3 : これは外国人？外国の人も聞きに來てるんやな。

私は留学して外国に行つて外国と交流したい。ニュースとかで外国と関係悪いから同じ人間として仲良くしたいと思います。だからこそ日本人としての基礎をちゃんとしたいです。やっぱりもう高学年だからちゃんとしなくちゃとふだんから思つて、ちゃんとするの大切なことは礼儀と感謝です。人として当たり前だけど大切です。感謝は伝えにくい。でも心の中から伝えたい。これは私の夢だけど、でも私だけの夢でなくて、外国行かなくても、英語とかしゃべらなくても心が繋がってみんなで協力して明るい未来を作りたいんです。

私は習字の先生になりたいです。私が目指す習字の先生は、焼肉定食といった面白い文字を作品として書かせたりするような先生です。習字といえば静かな感じで、精神的に寂しくなるようなイメージがあると思います。楽しくするために、こういうことを大切にしたいと思います。わざわざでもなく、静かでもない習字の教室にしたいです。なぜ、習字の先生かというと、今習っていることを、活用したいということと、日本特有の墨の黒さといった文化も大切にしていきたいからです。前に先生から習った金閣寺と銀閣寺の違いの良さにもあったと思うけど、そんな日本独自の黒を大切に、日本の文化を大切にしていきたいと思っています。

## 《フリートーク》

一人の語り（スピーチ）に対して、聞き手側となった子ども達が自由に感想や作品に対する評価を返す。そこから自由な話題に展開していく。

→このフリートークが重要である。伝わった実感を得ることができることはもちろん、そこからまだ見えなかった真実や語り切れなかった思いが浮かび上がることもあるからである。言葉がなかなか出ない子もいれば、ほとぼしるように出る子もいる。いずれの場合も、その場にいた仲間と目に見えない思いの共有もできたのではないかと考える。それは、自分と友達とをオーバーラップさせ、互いを認め合う同じ空間で友達も自分と同じように思いの実現を願ってつくっていた姿を見ていたからである。友達の制作やそれにかかわる姿を横目で見ながら、それはあたかも自分のことのように理解できたからであろうかと思う。その共通の制作の土台があってもなお、新しい目で見たり、視点で聞いたりすることで、話題や価値観の創造ができたのである。いかに「見る」という行為が奥深いものであるかが分かる。いくら見ても見飽きるということもなく、満足するというものもないかもしれない。違う方向や別の視点で見れば、また「見る」ことを継続して楽しむことができるのである。そうして、「見る」行為を通して、自分のよさや友達のよさに気づき、認めてもらうことで他を認めることもできるようになっていく。自己や他己の互いのよさの発見につながっていくことは意味深いことである。



【写真8】授業の様子



【写真9】授業の様子

## 《クロスセッション》

全員の語りを終えると、メンバーチェンジを行う。それぞれが作品をもって移動し、新しいメンバーと語り合う。作品をつくっているときのグループとは変わるので、新鮮みもあり、また新しい視点をもった友達が加わり、盛り上がる。

A子：（作品の背景を指しながら）  
これ飛行機に見える？  
C1：飛行機に見える。  
C2：新幹線にも見える。  
A子：英語は難しいけどかんばらなあかん。それに中国語なんかも入りそうじゃない。アンニョンハセオとかの韓国語とかいろいろと対応しないといけない。  
C3：いろんな人が乗ってくるものね。  
A子：お客さんの中にはむかつく人もいるかもしれん。それでも対応しないといけないし…。  
C2：内心、むかついていても笑顔やな。頑張れ！  
ポーカフェイス。

【参観者授業記録より】

このような、一人ひとりのスピーチを作品と重ね合わせてみると、子供たちが批評的な思考を働かせ自己との対話を重ねてきたこれまでの製作プロセスがより見えてくる。

「自分は、なぜその仕事に就きたいのか？」「本当にその仕事の価値や苦勞をわかっているのか？」「その夢を実現させるためには今何をすべきなのか？」大人になった自分の姿を表現していくために、子供たちはこのようないくつもの難問と向き合ってきたのであろう。どの人物の手・足・顔の表情にも、仕事に対する構えの気持ちを込められていることにも、道具や背景の細部に仕事内容に対する理解や工夫が表現されていることにも頷かされてしまう。

そして、作品に託した子供たちの夢が、単なる憧れでないことが本当によく伝わってくる。12歳の彼らが、本気で将来の夢と向き合い、大人になった未来の自分とも対話しているのである。一人ひとりが本気で語り合える場を1年間かけて築き上げてきた渡邊学級の授業のすごさをここに見せつけられた。子どもたちと先生の信頼関係が基盤にあって成り立つ本気の授業である。

（福井大学教育地域科学部 教授 濱口由美）

## II 国語科・図画工作科の展開について

《ハーベストタイム》

作品鑑賞の観点と国語科の「話す・聞く」の観点をもとに、振り返りを行う。

（授業の様子から）

T：自分の話し方で国語的な面からこういう点が課題になったな、こういう点がうまくいったなということを発表してください。

C1：これまでにこうやってしゃべったり反応したりすることを学んだんだけど、考えて言うことが苦手で、今日（の時間で）こうやって整理して話すことが分かりました。

C2：緊張して声の大きさとかはよかったと思うんですけど、間の取り方とか相手が「うーん」と思っているときにもしゃべってしまって、そこをこれから気をつけたいと思いました。

T：ということは、相手の反応も見ることができるって間の取り方も上手にできるということかな。

C3：伝えたい思いが、テーマが結構重かったのも、夢は作家なんですけど、本屋でぼくの本を見かけたら買ってくださいみたいなソフトジョークも入れられるとよかったなと思いました。

T：素晴らしいの。知ってた？先生、初めて知ったわ。

## III 道徳の展開について

学習はこれで終わるのかのように思えた子ども達も、実はここからが本当にこれからの自分に大切なことについて考える核心であることに気づく。先ほどまでの学習のなかで得たことに、作品だけでなく自分自身を対面させ、つきあわせていくという新たな作業になる。ここは、みんなの前で行わなくてもいいのではないかとも思える部分であったが、あえて子ども達に投げかけていくことにした。その真意は、この学級集団を、自己開示ができる集団だと心から信頼していたからであり、ここを突かねば、真実は見えないと判断したからである。学級全体の前で子ども達は、自分自身に問い、答えを見つけていくことができれば、今の自分を見つけることができるはずである。

信じた子ども達は、期待通り、いやそれ以上に自分自身に迫ってくれたと思う。大事なことは明日に向かって力強く生き抜こうという意志なのである。

（授業の様子より）

T：夢をかなえるためにはどうしたらいいと思う？

C1：あきらめないこととめんどくさがらないことです。

C2：あきらめないで、先生も言ってるけどできるだけ努力をする、その時の自分の精一杯を出すこと。

C3：小さな目標からこつこつとやっていく。

C4：中途半端はやめる。

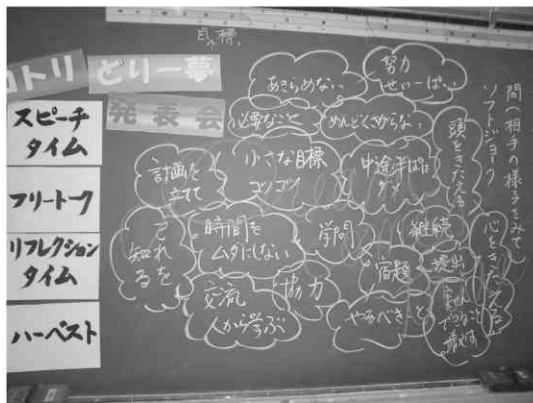
C5：小さい子が言うみたいなんですけど、だらだらせずにきばきと時間を使うこと。

C6：中途半端をやめることと似てるけど、継続すること。

T：あなたの好きな言葉あるじゃない。何？



- C 6 : 継続は力なり。  
 C 7 : 計画を立てて行うこと。  
 C 8 : 頭をよくする、提出物をさっさと出すことをがんばりたいです。(笑)  
 C 9 : もっと頭をよくする。  
 C 10 : 夢に近づくために、自分のまだ足りていないことをちゃんと知ること。  
 T : 難しい言葉で言うと、己を知るだね。  
 C 11 : 頭を鍛えることも大事だけど、これから挫折することもあるだろうから、心も鍛えることが大事だと思います。  
 (「今それ言おうとした。」の声。)  
 C 6 : いろいろな人と関わって、そのいろいろな人から学んだり、何かもっと先に行っている人や上に行っている人からもいろいろなことを教えてもらう。(なるほどの声)  
 C 12 : 宿題をやることと似てるんですけど、自分のやるべきことを全てやること。  
 C 13 : 私は、実践できることは実践して、できることを増やしていくこと。…



【写真10】授業の様子

次から次へと、あふれんばかりの子ども達からの、心の声がみんなの心に届けられた。その一人一人の心の声を聴く一人一人がまた、素晴らしかった。みんながうなづき、それぞれの言葉を温かく、また厳しく重く受け止めていた。誰もがみんなの夢の理解者であり、応援者であった。強く前向きに生きる同士になっていた。

「Dream comes true」—ここで私は、卒業担任として、夢をつかむことについてのメッセージを伝えた。思いを伝えることは、教師でも同じである。教師の願いや思いを素直に伝えることで子ども達は何かを感じ取ってくれる。そう信じて、いつも私は心からのメッセージを届けている。そして、あのとき一、私の熱い思いは伝わったと信じる。力強く生きていこうとする子ども達のこれまた熱い思いも感じる事ができたことで、私の使命は全うできたかもしれないと思えた瞬間、目頭が熱くなる

のを静かに感じていた。

最後に、卒業生を送る会で踊った「イロトリドリ」の歌を、子ども達は頬を紅潮させながら力強く歌って踊った。まさしく、まだ若い若者のエネルギーは教室いっぱいにあふれ出した。その満ち足りた熱い空間のなかで、自分の成長と友達の成長を心から喜び、味わうかのように。そして、自分の向かうべき道を見失わないように、確かめるかのように。

私は、担任という立場を超えて、いつまでも、いつまでも未来へ歩み出す子ども達へ、心からのエールを送り続けたいと願った。

### ③ 授業を終えて

まるで、大きな仕事を成し遂げたように子ども達の顔つきは晴れやかであった。その日の心のノートにはこの授業の充実感がたくさん綴られていた。

(学級通信より)

自分の言葉を探し、ふりしぼりながら、選んで何とか伝えようという思いの熱さに私は胸が打ち震えるのを感じました。こんなにも、必死で前向きに生きようとする12歳の子ども達。まだ12年という短い時間の中で、こんなにもたくさんのことを考え、生きてきたのです。そして、何より、まださらにによりよい生き方を日々求めようとしている…夢の実現に向かってどう生きたらよいのか、自分をしっかりと見つめている子ども達の底力とエネルギーとひたむきさを感じた、熱い熱い一時間。(最後に私の夢も伝えたくなり、私も思い切って伝えました。)夢を目標に変え、夢の実現のために、お互いがんばっていくことを誓い、みんなで『イロトリドリ』を歌って踊りました。その子ども達に、私は明るい未来を感じ、幸せをかみしめることができました。

ありがとう、みんな。そして、一生忘れない、みんなのこととこの授業のこと…。

※これまで学級担任としてほとんどの学級で学級通信を書いてきた。その日、その時子ども達が何をどう考え、どう動いたのか、そうやってみるとのが楽しいからである。子ども達と共に日々を生きている感じがするからである。

(授業後の児童の感想より)

### 【国語科の観点をふまえた感想】

- 他の人のスピーチは、話す中心があってそれについての内容を話したり、問いかけをしたりしてとても分かりやすかったです。
- 発表に大切なことは、自分だけの世界に入らず、みんなにも投げかけて、より深く考えてもらうことだと今回の時間で学びました。
- 「伝える」ってこんなに難しいのだと分かりました。



言葉ってすごいと感じました。

- ・自分がただただ話すのはおもしろくないので、工夫をたくさんしました。問いかけを入れたり、あこがれている人の言葉を入れたり、言葉の説明をしたり、とがんばりました。このスピーチのおかげでスピーチのおもしろさ楽しさを学びました。
- ・最初に夢を言わずあえて、「戦争とは何か」と問いかけをしたところ。問いかけで始まって後で夢を言いました。じらし作戦です。他にもソフトジョークを言ったりしました。
- ・最初は書きもせず、何も見ないでスピーチできるか心配になりました。でも、頭の中で整理して話す順序を決めて言うことができたのでよかったです。
- ・聞く側になってよかった点は、反応を変えて、うなずき、あいづち、言う人の目を見て、を心がけることができた点です。
- ・ぼくはこの『イロトリドリ一夢』でやっと話す楽しみを理解することができました。とっても楽しかったし、自分の作品をみんなにアピールできたのでよかったです。

#### 【道徳的な観点からの感想】

- ・いろんなスピーチを聞いてそれぞれの夢についてみんないろいろな思いがあって、私も自分の夢をかなえたいと思いました。みんな尊敬する人物やなりたいという具体的な理由があってとてもいいなと思いました。…
- ・…緊張はもちろんしたけど、みんながサポートしてくれたので「楽しい」と感じるすることができました。
- ・これからは相手のことも頭に入れてスピーチをしたかったです。そして、相手に思いを伝えるのは難しいけど、思いを伝えることは生きていく中で大切なことなのでがんばりたいと思いました。
- ・みんな人それぞれ夢は違うけど目標に向かってるのはいいです。自分の夢をかなえるために、苦手なものを得意になっているようにできたらいいなと思いました。
- ・自分も将来の夢に向かってたくさん努力するし、友達にも将来の夢に向かってがんばってほしいです。
- ・でも話し始めるとみんなが「うん、うん」と聞いてくれるので、たくさん語って語って…そうしている間に時間が過ぎてしまいました。語るとみんな目がキラキラしていて、そのくらいその夢にあこがれてがんばっているんだなと思いました。私もがんばります。
- ・この授業では1つのテーマでいろいろな額縁をはめて考えることができたのでよかったです。卒業するまでにたくさん深く考えられたし、友達とも絆を深

められたので、よかったです。両方届ける側も聞く側も優しさがいい発表会ではできなかったと思いました。これも協力しないとできないものでした。

- ・人の話を聞いていると「この子はこういうところがいいとこだなあ」と思ったり自分にも活かそうと思ったりしました。
- ・夢についてこんなに深く考えたのは初めてで、改めて自分の夢が知れた気がしました。もう一つこの授業で思ったことは夢をかなえたいなら、こつこつがんばっていかないといけないなと実感しました。ぼくはまだ、自分に足りないところがあるのでそこを補っていきなと改めて思いました。

子ども達の日常の構えが分かるし、学級の安定感も分かる。また、自己理解同様、他者理解が深く育ったこともみとることのできる内容が多かった。

#### 【参観者授業記録より】

…初めて参観させていただいたのですが、参観した授業以外の普段の日常生活、先生と子どもとのやり取りが何となくわかるような不思議な感覚でした。それくらい日常的に子どもたちとやり取りをして、子どもたちが学級の中で安心して自分をひらいて生き生きと生活しているのを感じました。子どもたちのエネルギーと渡邊先生の安心感…うまくまとめられませんが、こんな先生になりたいと思いました。「イロトリドリ」で全員が輪になって声を合わせ、踊っている姿を見て、とても感動しました。

(教職大学院2年 後藤歩美)

### 3. 成果と課題

#### (1) 図画工作科の果たす役割

図画工作科は、小学校教育のなかでは、今大切にされていると言い難い現状にある。その理由の一つには、生きていくのに、本当に必要な教科なのかということについての答えが不明確だからであるからかもしれない。先日、テレビで、横井庄一さんの28年間のサバイバル生活のドキュメンタリーを拝見した。そこには、私の予想に反して、単にアメリカ軍から逃げるだけではないもう一つの生き方があったことに少なからず驚いた。それは「ものづくり」に依る日々だったということだった。ものをつくり出すことが即ち生きる目標となり、明日に命をつなぐ動機になり、生きるという使命になり、結果的に命をつないだのである。そこと連動して考えていくととても自然な形で図画工作科の可能性が見えてくるのである。

また、小学校教育にあつては、細かな点の集合によって成り立ちがちな学習を、一連の意味づけによってくると理解がしやすい。そういう形で学習を積み重ねれば、育つ力もより確実なものとなる。であるならば、図画工

作科に新たに課せられた役割も見えてくる。それは、各教科のテーマの共有部分を図画工作科によって一つにするというコーディネーター的な役割である。そのコーディネートの視点はまさに「ものづくり」であり、創造する楽しさは「生きる力」の原点であることに気づいてもらうことが、大事ではないだろうか。



【図9】図画工作科の役割

また、この世の発展を支える技術革新に付随している重要なしかけの一つが、色と形にあるといっても過言ではないだろう。色と形、そこに自分の思いを寄せたり、価値づけをしたりしながら、自分らしさを表現して生きていくことに喜びを見出せないか。自分の存在の自分らしさを見つけ出せないか。豊かな人間性から生まれる独創性と発想の柔軟性が技術革新と持続可能社会を支えていくのだ。その根幹を支えるのは図画工作科で育む力があることになるのである。

さらに、ともに生きる喜びを共有し合えるためには、図画工作科の自己決定と自己実現という思考・判断のフロアが大変有効である。自分のよさを認められることや自己肯定感をもてることは、生きる力の原動力になる。そして、それが周りの人への理解や他己肯定感を育み、人や自然とともに生きる思いやりを育むのであらうと考える。

## (2) 教科の関連性を活かした学びのデザインから

### 生きる力を育むことの再考察

これらの実践を通して見えてきたことは、例えば子どもであっても「生きる」ことに対しては、真剣でなければならない、真剣に生きるためにいろいろな学習や活動を通して、考える機会を幾度となくもたなければならないということである。その考える機会をもつということの明快な解決策が、常に頭のどこかに「生きる」という命題を掲げておくことであることに気づいた。そのために教科の関連性を活かすことに目を向けた今回の取り組みは、限られた授業時数のなかにあつては、掲げられた命題について、学びや力を積み上げていっている実感が味わえる有効な手だてであったと言える。広い視野で考えること、長いスパンで考えること、大きな考えるべきテーマをもち続けることが、子どもの人間形成には大事なのである。

子ども達一人一人の理解度や達成度、思いはそれぞれ

である。同じような土俵に立たせて、均一な結果を期待できるのかとも思う。しかし、だからこそ、あえてスパイラルの学びが有効であるとも言える。明るく強く、優しく楽しく生きるために、自分に欠けているもの、まだ可能性が開かれていない未知の部分、人との違いと自分のよさに気づくことなどは、あらゆる場面で、学習で、日々更新されなければ意味はないのである。

また作品鑑賞の視点から言えば、作品を「好き」「嫌い」あるいは「上手」「下手」などの短絡的な観点で見ただけでは、本当の作品を見る楽しさは分からないのかもしれない。確かに、色と形のメッセージから作品を味わう力を養うのが本来の図画工作科に違いない。しかし、小学校教育における人間形成の土台を育むという部分に目を向けると、作品を知ること、即ちその友達のよさの理解であり、他者理解と同時に自己肯定感へ導く過程になることも事実なのである。図工美術といった芸術の域を超えて、小学校には小学校の特異な味わい方もあるのではないだろうか。その友達と共に暮らし、考え、同じ行事を体験し、認め合い励まし合う仲間同士だからこそ、その作品に裏付けされた思いや人となりをも味わう必然性もあるのではないか。そこを、省いては語れないのではないか。

確かな学力を身につけるためにたくさんの教科や教育活動があり、それぞれに目標もねらいもある。しかし、教育は人を育てているのである。人を育てるには、目標達成のために専門性や既成の概念にとらわれているだけでは育たない部分があるのかもしれない。鑑賞は大事な図画工作科の学習であり、造形的な資質や力を育むために行うものであるが、あくまで表現に呼応する思いを知ること、楽しく深い鑑賞活動が生まれるのもまた事実なのである。

教科を関連させる大きな学びの全体で子どもを育てる視点に立てば、「表現する」、「伝え合う」、「考える」、「見る」などという一つの学習活動に、大きな思いやりとか愛情とかいうものを、加味するこの大切さに気づく。それが、結局教育にはもっとも大事なことであり、見落としはいけない部分でもある。常日頃の共同体である学級集団の中で、互いを知る喜びをもち、やがて人との関わりの中で生きる力と意志をもった子への育ちにつながっていくように、みんなが善の方向性で良き人間理解をすることが大事である。

一つ一つの教育活動を有効に機能させられるか、台無しにするかは担任の意識の仕方一つである。

あらゆる教育活動を、人を育てるため、生きる意志をもった子どもを育てるための糧にすることに真の意義があることを、我々教師は心の奥深くにもち、目の前の子どもと対峙すべきなのだ。全ての子どもが前を向いて力強く生きていけるように。

【付記】：写真の掲載については、保護者のご了解を得ています。

【作品介绍】



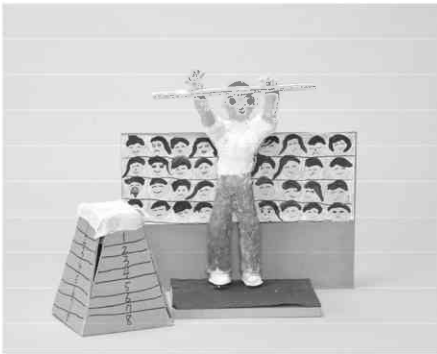
【写真11】 作品  
ナイチンゲールのような存在



【写真12】 作品  
出発しんこ〜う！



【写真13】 作品  
日本と外国のかけ橋になる！



【写真14】 作品  
鉄棒世界一



【写真15】 作品  
君の街まで



【写真16】 作品  
小学校の先生



【写真17】 作品  
「パティシエ」  
～みんなに幸せを届ける～

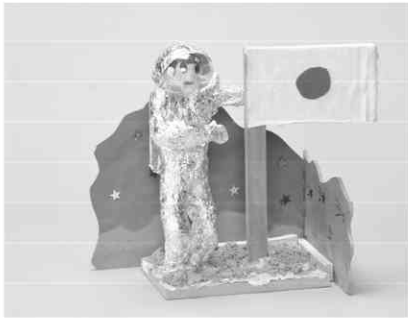


【写真18】 作品  
みんなに信頼される書道の先生



【写真19】 作品  
なばボクシヨ





【写真20】作品  
宇宙へ行く自分



【写真21】作品  
私の薬でげんきになあれ



【写真22】作品  
かわいいアクセサリー売ります



【写真23】作品  
有名なデザイナーになる



【写真24】作品  
笑顔あふれる学校教師



【写真25】作品  
世界をとびまわる

**Promoting Student Ability for Living Effectively by Learning Design that Makes Use of Relevance to Other Subjects  
-Learning Method for the Possibility of Researching Art as a Subject-**

Junko WATNABE

Key word : relevance to other subjects, integrated unit, learning design, ability for living, spiral